

戦国秦漢時代における顔回像の変遷

井ノ口 哲也
(哲学・倫理学)

要 旨

顔回は、孔子から唯一人、自分より能力が上であると認められた弟子である(『論語』公冶長篇)。「韓非子」顕学篇によると、孔子没後に儒家は八派に分かれたが、郭沫若『十批判書』は、そのうちの「顔氏之儒」から莊子が出たと視る。『莊子』中における仲尼と顔回の会話は、孔子と顔回という儒家の大物が儒家思想を否定し『莊子』の重要な思想を伝えようとした『莊子』作者の立場を示している。上海博物館所蔵戦国楚竹書『顔淵問於孔子』は、『莊子』外篇の作成に関与した莊周の後学が『老子』や『論語』を援用して自らの主張を記したものではなからうか。さらに、『史記』孔子世家・仲尼弟子列伝は、『論語』を踏まえている部分が多いが、孔子世家における孔子の問いに子路→子貢→顔回の順で答えるくだりや、『韓詩外伝』と劉向の『新序』『説苑』に共通する顔回の登場する二つの説話は、『荀子』に由来しているようである。

後漢時代には、前漢時代に見られない顔回の死をめぐる話が『論衡』に見える。王充の運命論と虚妄を疾む批判のメスは、顔回の死をめぐる話にも及んだのである。また、『論語』鄭玄注では、子罕篇「後生可畏」の「後生」を顔回だとする解釈が示されるなど、ふつうに読めば顔回についてのくだりであると思えない『論語』の文章が鄭玄によって具体化・限定化された。そして、後漢末期、孔融と禰衡は、自分たちを孔子と顔回の関係に擬えた。このように、戦国秦漢時代における顔回へのアプローチはきわめてユニークであり、顔回像もバラエティに富んでいた、と言える。

キーワード：『論語』、顔回、孔子

一 はじめに

顔回は、孔子の数多くの弟子たちの中で、孔子から唯一、自分より能力が上であると認められた者である。しかし、後世の者たちから、顔回はどのように評価されてきたのであろうか。

本稿では、まず『論語』本文からうかがえる顔回像を確認し、次に「顔氏之儒」との関連で『莊子』における仲尼と顔回の会話について検討する。そのこ

とを踏まえて、上海博物館所蔵の戦国楚簡『顔淵問於孔子』の表現や内容の面から、当該書の成立の背景をさぐる。そして、『史記』の孔子世家と仲尼弟子列伝の顔回伝に焦点を絞って顔回についてどのように記されているかを確認し、前漢時代の説話における孔子と顔回の会話に注目したあと、後漢時代における顔回像について、私見を述べる。

われわれは、顔回像の変遷を通して、新たに何を知らることができるであろうか。

二 『論語』本文

『論語』には、顔回の名が出るくだりが都合二十一ある。いま、1～21の番号を振ったうえでそれらを『論語』の登場順(篇名順)に並べると、以下のとおりである。

なお、()内の文言は、現存最古の『論語』である前漢時代の定州漢墓竹簡『論語』の文言である。これが『論語』のオリジナルにより近いと考えられる。これに関しては、河北省文物研究所定州漢墓竹簡整理小組『定州漢墓竹簡論語』(文物出版社、一九九七年七月)に拠り、通行本の『論語』本文に併記して掲げることとする。

- 1 子曰、「吾与回言終日、不違如愚。退而省其私、亦足以發。回也不愚。」
(為政篇)
- 2 子曰、「吾與回言終日、不違(如)愚。退而省其私、亦足(第一四号簡)……」
(第一四号簡)
- 3 子謂子貢曰、「女与回也孰愈。」对曰、「賜也何敢望回。回也聞一以知十、賜也聞一以知二。」子曰、「弗如也。吾与女弗如也。」
(公冶長篇)
- 4 顏淵・季路侍。子曰、「盍各言爾志。」子路曰、「願車馬衣輕裘、与朋友共、敝之而无憾。」顏淵曰、「願無伐善、無施勞。」子路曰、「願聞子之志。」子曰、「老者安之、朋友信之、少者懷之。」
(公冶長篇)
- 5 子問曰、「弟子孰為好學。」孔子对曰、「有顏回者、好學、不遷怒、不貳過、不幸短命死矣。今也則亡、未聞好學者也。」
(雍也篇)
- 6 子曰、「賢哉回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷。人不堪其憂、回也不改其樂。賢哉回也。」
(雍也篇)

- 7 子曰、「賢哉、回也。一單食、一(第一二〇号簡)……」
子謂顏淵曰、「用之則行、舍之則藏、唯我与爾有是夫。」子路曰、「子行三軍、則誰与。」子曰、「暴虎馮河、死而無悔者、吾不与也。必也臨事而懼、好謀而成者也。」
(述而篇)
- 8 顏淵喟然歎曰、「仰之彌高、鑽之彌堅、瞻之在前、忽焉在後。夫子循循然善誘人。博我以文、約我以禮。欲罷不能、既竭吾才、如有所立卓爾、雖欲從之、末由也已。」
(子罕篇)
- 9 子曰、「淵喟然嘆曰、」印之迷高、□□迷堅。瞻之在前、忽(第二二二号簡)……〔然善瞞人、博〕我以文、約我以禮、(第二二三号簡)……聖。雖欲從之、未由也〔已〕。〔(第二四号簡)〕
(子罕篇)
- 10 子曰、「語之而不惰者、其回也与。」(第二三二号簡)
子謂顏淵曰、「惜乎、吾見其進也、未見其止也。」
(子罕篇)
- 11 德行、顏淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓。言語、宰我・子貢。政事、冉有・季路。文學、子游・子夏。
(……淵、閔子騫、冉伯(第二六一号簡)……有、子路。文學。子〔游・子夏〕。(第二六二号簡))
(先進篇)
- 12 子曰、「回也非助我者也、於吾言無所不說。」
(子曰、「回(也非助我者也、於)吾言無所不說。」(第二六三号簡))
(先進篇)
- 13 季康子問、「弟子孰為好學。」孔子对曰、「有顏回者。好學、不幸短命死矣。今也則亡。」
(……短命死矣、今也則亡。」(第二六五号簡))
(先進篇)
- 14 顏淵死。顏路請子之車以為之椁。子曰、「才不才、亦各言其子也。鯉也死、有棺而無椁。吾不徒行以為之椁。以吾從大夫之後、不可徒行也。」
(顏淵死、顏路請子之〔車〕□□□□孔子曰、「材不材、(第二六六号簡) (先進篇)

- ……言其子也。鯉也死、有棺無郭。吾不徒行以為之郭。(第二六七号簡)
 從大夫之後也、吾不可(第二六八号簡)……
- 15 顔淵死。子曰、「噫、天喪予、天喪予。」(先進篇)
- 16 顔淵死。子哭之慟。從者曰、「子慟矣。」子曰、「有慟乎。非夫人之為慟、而誰為慟。」(先進篇)
- 17 (顔淵死、子哭之動。從者曰、「子動矣。」曰)(第二六九号簡)……
 顔淵死。門人欲厚葬之。子曰、「不可。」門人厚葬之。子曰、「回也視予猶父也、予不得視猶子也。非我也、夫二三子也。」(先進篇)
- (顔淵死、門)人欲厚葬之。子曰、「不可。」(第二七〇号簡)……〔回〕也視予猶父也、予不〔得視〕子也。非我也、夫二三(第二七一号簡)……
- 18 子曰、「回也其庶乎、屢空。賜不受命而貨殖焉、億則屢中。」(先進篇)
 (孔子〔曰〕、「回也其庶乎」、(第二八二号簡)居空。賜〔不受命〕、○貨殖焉、意則居中。」(第二八三号簡))
- 19 子畏於匡。顔淵後。子曰、「吾以女為死矣。」曰、「子在、回何敢死。」(先進篇)
 (子畏於匡、顔淵後。子曰、「吾以女為死矣。」曰、「子在、回何敢(第二九〇号簡)……)
- 20 顔淵問仁。子曰、「克己復禮為仁、一日克己復禮、天下歸仁焉、為仁由己、而由人乎哉。」顔淵曰、「請問其目。」子曰、「非礼勿視、非礼勿聽、非礼勿言、非礼勿動。」顔淵曰、「回雖不敏、請事斯語矣。」(顔淵篇)
- (……〔非〕禮勿〔視〕(第三一一号簡)……)
- 21 顔淵問為邦。子曰、「行夏之時、乘殷之輅、服周之冕、樂則韶舞。放鄭聲、遠佞人。鄭聲淫、佞人殆。」(衛靈公篇)
- (……曰、「行夏之□、乘殷之路、服周之統、(樂則□)(第四二五号簡)〔武〕。放鄭聲、遠佞人。鄭聲淫、佞人殆。」(第四二六号簡))

この『論語』の二十一箇所の記述からは、孔子の言うことを素直に受け入れ、貧しい生活の中にあっても、自らの楽しみを改めず、全力投球で精進を重ねる優秀な顔回の姿を描くことができよう。

木村英一氏は、「思うに顔淵は孔子と全く一體であって、もし孔子が居なければ彼はどんなであったかは想像し難い。」と述べ、また、顔淵を「聖人孔子の影のような存在」とも表現している【注〇一】。すなわち、顔回到に語らせた**いばあい**、きまつて孔子も一緒に登場するのが基本ということになる。さて、『韓非子』顯学篇によれば、孔子の死後、儒家は八派に分かれた。

世之顯学、儒・墨也。儒之所至、孔丘也。墨之所至、墨翟也。自孔子之死也、有子張之儒、有子思之儒、有顔氏之儒、有孟氏之儒、有漆雕氏之儒、有仲良氏之儒、有孫氏之儒、有樂正氏之儒。……故孔・墨之後、儒分為八、墨離為三、……。(『韓非子』顯学篇)

八派のうち傍線を付した「顔氏之儒」については、皮錫瑞氏と郭沫若氏に考察がある。まず、皮氏の見解をうかがってみよう。

『韓非子』言八儒有顔氏。孔門弟子、顔氏有八、未必即是子淵。【注〇二】
 これに対する周予同の注には、こうある。

按『史記』仲尼弟子列伝、除顔回外、尚有顔無繇・顔幸・顔高・顔祖・顔之僕・顔噲・顔何七人、故云顔氏有八。子淵、顔回之字。【注〇三】

すなわち、皮氏は、「顔氏之儒」が必ずしも顔回の流れを汲む儒家を指すとは限らない、との見解である。

次に、郭氏の見解をうかがってみよう。

「顔氏之儒」当指顔回的一派。顔回は孔門の第一人、他雖然早死、但在他生前已經是有「門人」的。這一派的典籍和活動情形、可惜已經失傳了。只有關於顔回個人、我們在『論語』和其它書籍裏面可以找到一些資料。我們知道他是「其心三月不違仁」的人、「一簞食、一瓢飲、在陋巷。人不堪其憂、回不改其樂。」他很明顯地富有避世的傾向、因而『莊子』書中関

於他の資料也就特別多、全書計凡十見、「人間世」「天運」「至樂」「達生」「田子方」「知北遊」諸篇各一、「大宗師」「讓王」二篇各二。【注〇四】

ふつうに考えれば、顔回は、孔子より先に死んだのであるから、「顔氏之儒」は、孔子没後の顔回の系統の学派ではないであろう。『論語』からは、顔回に門弟がいたことを確認することができない。郭氏の言う「門人」は、「顔氏之儒」が顔回の流れを汲む儒家の一派であることをどうにか説明するための辻褃合わせではないのか。

いずれにせよ、郭氏が指摘するように、『莊子』には、顔回が多く登場する（郭氏はその数を十とするが、間違いである。十五が正しい）。このことの意味を考えてみたい。

三 『莊子』における仲尼と顔回の会話

さて、郭沫若氏は、

韓愈疑莊子本是儒家。出於田子方之門、則僅據外篇有田子方篇以為說、這是武斷。我懷疑他本是「顔氏之儒」、書中徵引顔回與孔子的對話很多、而且差不多都是很關緊要的話、以前的人大抵把它們當成「寓言」便忽略過去了。那是根據後來所完成了的正統派的儒家觀念所下的判斷、事实上在孔門初二代、儒家並不是那麼純正的、而儒家八派之中、過半数以上已經完全消滅了。【注〇五】

と述べて、莊周はもと「顔氏之儒」ではなかったか、とする。莊周が「顔氏之儒」から出た証左として、郭氏によって『論語』本文8との関連を指摘されているのが、次の『莊子』田子方篇の文章である。

顔淵問於仲尼曰、「夫子歩亦歩、夫子趨亦趨、夫子馳亦馳。夫子奔逸絶塵、而回墮若乎後矣。」

夫子曰、「回、何謂邪。」

曰、「夫子歩亦歩也、夫子言亦言也。夫子趨亦趨也、夫子辯亦辯也。夫子馳亦馳也、夫子言道、回亦言道也。及奔逸絶塵、而回墮若乎後者、夫子不言而信、不比而周、無器而民滔乎前、而不知所以然而已矣。」

仲尼曰、「悪、可不察與。夫哀莫大於心死、而人死亦次之。日出東方、而入於西極、万物莫不比方。有目有趾者、待是而後成功。是出則存、是入則亡。万物亦然。有待也而死、有待也而生。吾一受其成形、而不化以待尽。効物而动、日夜無隙、而不知其所終。薰然其成形、知命不能規乎其前。丘以是日徂、吾終身与汝交一臂而失之。可不哀與。汝殆著乎吾所以著也。彼已尽矣。而汝求之以為有。是求馬於唐肆也。吾服汝也甚忘。汝服吾也亦甚忘。雖然汝奚患焉。雖忘乎故吾、吾有不忘者存。」（『莊子』田子方篇）

郭氏は、田子方篇のこの文章は『論語』本文8が原型であり、「顔氏之儒」から出ていると説く【注〇六】。衣笠勝美氏も「確かにこの両章の記述は酷似している。」と述べる【注〇七】。しかし、筆者には、そうは思えない。孔子に対する顔回の尊敬と感謝の念を記した『論語』本文8とこの田子方篇の文章は、孔子をとて追いつけない存在である、としている点が共通している程度であり、文言を踏襲している等の特徴も見られない。ただ、『莊子』の作者が『論語』の表現を用い、孔子と顔回を特別に意識していたことは事実である。『莊子』の作者は、『論語』の表現を利用し孔子と顔回を登場させることに、いったい何を意図していたのであろうか。

実際に、『莊子』における、仲尼と顔回の会話の実例を見ることにしたい。例えば、大宗師篇の、

顔回曰、「回益矣。」

仲尼曰、「何謂也。」

曰、「回忘仁義矣。」

曰、「可矣。猶未也。」

它日、復見曰、「回益矣。」

曰、「何謂也。」

曰、「回忘礼楽矣。」

曰、「可矣。猶未也。」

它日、復見曰、「回益矣。」

曰、「何謂也。」

曰、「回坐忘矣。」

仲尼蹵然曰、「何謂坐忘。」

顔回曰、「墮肢体、黜聰明、離形去知、同於大通。此謂坐忘。」

仲尼曰、「同則無好也。化則無常也。而其賢乎。丘也請從而後也。」

は、顔回が師・孔子を相手に、「仁義」「礼楽」を「忘」れた先に、「坐忘」の境地に達したことを説いたものである。これは、儒家の「仁義」「礼楽」を否定したうえで、「坐忘」の価値を唱えるものである。すなわち、『莊子』は、儒家の二人の大物に、儒家の看板とも言える「仁義」「礼楽」を自己否定させたうえで、『莊子』特有の重要思想である「坐忘」について語らせているのである（この大宗師篇の話は『淮南子』道応篇に受け継がれる）。

こうした仲尼と顔回の会話について、池田知久氏は、

この問答は、勿論『莊子』の創作であって、戦国時代後期に最も羽振りのよい学派の宗師とその高弟とに、対立するわが道家の道を解説させているのは、一つには儒家聖賢の権威を冒瀆すること、二つにはその流れを汲む現代儒家を皮肉ること、三つにはわが道が他学派の宗師・高弟にも支持されるほど、深く正しく普遍性をもつことを訴えること、などのためである【注〇八】。

と述べている。筆者もこれに賛成であるが、孔子と顔回という儒家の大物の権威を借りなければ自己の重要な思想を伝え得ない『莊子』の作者の置かれた立場をうかがい知ることができる。

さらに、仲尼と顔回の会話で注目されるのは、孔子が遭った「陳・蔡之間」の厄に関する話である。『莊子』には、以下のとおり、①山木篇・②讓王篇・③天運篇の三ヶ所に見える。

①山木篇

孔子窮於陳・蔡之間、七日不火食。左據槁木、右擊槁枝、而歌。焜焜氏之風。有其具而無其數、有其声而無宮角。木声与人声、犂然有当於人之心。顔回端拱還目而窺之。

仲尼恐其廣已而造大也、愛已而造哀也。曰、「回、無受天損易、無受人益難。無始而非卒也。人与天一也。夫今之歌者、其誰乎。」

回曰、「敢問『無受天損易』。」

仲尼曰、「飢渴寒暑、窮極不行、天地之行也、運世之泄也。言與之偕逝之謂也。為人臣者、不敢去之。執臣之道猶若是。而況乎所以待天乎。」

（顔回）「何謂『無受人益難』。」

仲尼曰、「始用四達、爵祿竝至而不窮、物之所利、乃非已也。吾命有在外者也。君子不為盜、賢人不為竊。吾若取之何哉。故曰、『鳥莫知於鸚鵡。目之所不宜処、不給視。雖落其实、棄之而走。其畏人也。而襲諸人間、社稷存焉爾。』」

（顔回）「何謂『無始而非卒』。」

仲尼曰、「化其万物、而不知其禪之者。焉知其所終、焉知其所始。正而待之而已耳。」

（顔回）「何謂『人与天一』邪。」

仲尼曰、「有人、天也。有天、亦天也。人之不能有天、性也。聖人晏然体逝而終矣。」

②讓王篇

孔子窮於陳・蔡之間、七日不火食。藜羹不糝、顔色甚憊。而弦歌於室。

顔回挹菜。子路・子貢相与言曰、「夫子再逐於魯、削迹於衛、伐樹於宋、窮於商・周、困於陳・蔡。殺夫子者無罪、藉夫子者無禁。弦歌鼓歌、未嘗絶音。君子之無恥也若此乎。」

顔回無以応。入告孔子。孔子推琴、喟然而歎曰、「由与賜細人也。召而來。吾語之。」

子路・子貢入。

子路曰、「如此者、可謂窮矣。」

孔子曰、「是何言也。君子通於道、之謂通。窮於道、之謂窮。今丘抱仁義之道、以遭亂世之患。其何窮之為。故內省而不窮於道、臨難而不失其德。天寒既至、霜雪既降。吾是以知松栢之茂也。陳・蔡之隘、於丘其幸乎。」

孔子削然反琴而弦歌。
子路挖然干而舞。

子貢曰、「吾不知天之高也、地之下也。」

古之得道者、窮於樂、通亦樂。所樂非窮通也。道德於此、則窮通為寒暑風雨之序矣。故許由娛於潁陽、而共伯得乎共首。

③天運篇

孔子西遊於衛。

顏淵問師金曰、「以夫子之行為奚如。」

師金曰、「惜乎、而夫子其窮哉。」

顏淵曰、「何也。」

師金曰、「夫芻狗之未陳也、盛以篋衍、中以文繡、尸祝齋戒以將之。及其已陳也、行者踐其首脊、蘇者取而爨之而已。將復取而盛以篋衍、中以文繡、遊居・寢臥其下、彼不得夢、必且數昧焉。今而夫子、亦取先王已陳芻狗、取弟子、遊居・寢臥其下。故伐樹於宋、削迹於衛、窮於商・周。是非其夢邪。困於陳・蔡之間、七日不火食、死生相與鄰。是非其昧邪。夫水行莫如用舟、而陸行莫如用車。以舟之可行於水也、而求推之於陸、則沒世不行尋常。古今非水陸與、周魯非舟車與。今蘄行周於魯、是猶推舟於陸也。勞而無功、身必有殃。彼未知夫無方之伝、応物而不窮者也。且子獨不見夫桔槔者乎。引之則俯、舍之則仰。彼人之所引、非引人也。故俯仰而不得罪於人。故三皇・五帝之禮義・法度、不矜於同而矜於治。故譬三皇・五帝之禮義・法度、其猶粗黎・橘柚邪。其味相反而皆可於口。故禮義・法度者、応時而變者也。今取猿狙而衣以周公之服、彼必齧鬻・挽裂、尽去而後慊。觀古今之異、猶猿狙之異乎周公也。故西施病心而顰其里。其里之醜人見而美之、婦亦捧心而顰其里。其里之富人見之、堅閉門而不出。貧人見之、挈妻子而去之走。彼知美顰、而不知顰之所以美。惜乎、而夫子其窮哉。」

『論語』には、孔子の遭難に関する記事が述而篇・子罕篇・先進篇・衛靈公篇に見えるが、これらを具体的に大きく膨らませたのが『莊子』であった、ということか。

このほか、次の『莊子』讓王篇の事例のように、

孔子謂顏回曰、「回來、家貧居卑。胡不仕乎。」

顏回對曰、「不願仕。回有郭外之田五十畝、足以給飡粥、郭內之田十畝、足以為糸麻。鼓琴足以自娛、所學夫子之道者、足以自樂也。回不願仕。」

孔子愀然變容曰、「善哉、回之意。丘聞之、『知足者、不以利自累也。審自得者、失之而不懼。行脩於內者、無位而不作。』丘誦之久矣。今於回而後見之。是丘之得也。」

と、顏回の貧窮と不出仕に引っかけ『老子』の「知足」を説くものや、やはり貧窮であったことから顏回は仕官しなかったこととされ、以下の①人間世篇・②至楽篇の二例のとおり、顏回の政治力の無さを種に「心齋」等の『莊子』における重要な思想を説くものがある。

①人間世篇

顏回見仲尼、請行。

曰、「奚之。」

曰、「將之衛。」

曰、「奚為焉。」

曰、「回聞『衛君、其年壯、其行獨。輕用其國、而不見其過。輕用民死、死者以國量、乎澤若焦。民其無如矣。』回嘗聞之夫子、曰『治國去之、亂國就之。』」願以所聞思其則。庶幾其國有瘳乎。」

仲尼曰、「諱、若殆往而刑耳。夫道不欲雜。雜則多、多則擾、擾則憂、憂則不救。古之至人、先存諸己、而後存諸人。所存於己者未定、何暇至於暴人之所行。且若亦知夫德之所蕩、而知之所為出乎哉。德蕩乎名、知出乎争。名也者、相軋也。知也者、争之器也。二者凶器、非所以尽行也。且德厚信仁、未達人氣、名聞不爭、未達人心、彊以仁義繩墨之言術暴人之前者、

是以人惡有其美也。命之曰菑人。菑人者、人必反菑之。若殆為人菑夫。且苟為悅賢而惡不肖、惡用而求有以異。若唯無詔、王公必將乘人而闢其捷。而目將熒之、而色將平之、口將營之、容將形之、心且成之。是以火救火、以水救水。名之曰『益多』。順始無窮。若殆以不信厚言、必死於暴人之前矣。且昔者桀殺閔龍逢、紂殺王子比干。是皆脩其身、以下偪拊人之民、以下扞其上者也。故其君、因其脩以擠之。是好名者也。昔者堯攻叢・枝・胥敖、禹攻有扈、國為虛厲、身為刑戮。其用兵不止、其求實無已。是皆求名實者也。而獨不聞之乎。名實者、聖人之所不能勝也。而況若乎。雖然、若必有以也。嘗以語我來。」

顔回曰、「端而虛、勉而一、則可乎。」

曰、「惡、惡可。夫以陽為充孔揚、采色不定、常人之所不違。因案人之所感、以求容與其心。名之曰『日漸之德不成』。而況大德乎。將執而不化、外合而內不訾。其庸詎可乎。」

（顔淵）「然則我內直而外曲、成而上比。內直者、与天為徒。与天為徒者、知天子之与己皆天之所子。而独以己言斬乎而人善之、斬乎而人不善之邪。若然者、人謂之童子。是之謂與天為徒。外曲者、與人之為徒也。擊踞曲拳、人臣之礼也。人皆為之、吾敢不為邪。為人之所為者、人亦無疵焉。是之謂与人為徒。成而上比者、与古為徒。其言雖教誡之實也、古之有也、非吾有也。若然者、雖直不為病。是之謂与古為徒。若是則可乎。」

仲尼曰、「惡、惡可。大多政法而不謀。雖固亦無罪。雖然、止是耳矣。夫胡可以及化。猶師心者也。」

顔回曰、「吾無以進矣。敢問其方。」

仲尼曰、「齋。吾將語若。有而為之、其易邪。易之者、暋天不宜。」

顔回曰、「回之家貧、唯不飲酒茹葷者、数月矣。若此、則可以為齋乎。」
曰、「是祭祀之齋、非心齋也。」

回曰、「敢問心齋。」

仲尼曰、「若一志。無聽之以耳、而聽之以心。無聽之以心、而聽之以氣。耳止於聽、心止於符。氣也者、虛而待物者也。唯道集虛。虛者、心齋也。」

顔回曰、「回之未始得使、実自回也。得使之也、未始有回也。可謂虛乎。」
夫子曰、「尽矣。吾語若。若能入遊其樊、而無感其名、入則鳴、不入則止、

無門無毒、一宅而寓於不得已、則幾矣。絕迹易、無行地難。為人使易以偽、為天子難以偽。聞以有翼飛者矣、未聞以無翼飛者也。聞以有知知者矣、未聞以無知知者也。瞻彼闕者、虛室生白。吉祥止止。夫且不止、是之謂坐馳。夫徇耳目內通、而外於心知、鬼神將來舍。而況人乎。是萬物之化也。禹・舜之所紐也、伏羲・几蘧之所行終。而況散焉者乎。」

②至樂篇

顔淵東之齊。

孔子有憂色。

子貢下席而問曰、「小子敢問、回東之齊、夫子有憂色。何邪。」

孔子曰、「善哉、女問。昔者管子有言。丘甚善之。曰『褚小者不可以懷大、綆短者不可以汲深。』夫若是者、以為命有所成、而形有所適也。夫不可損益。吾恐回與齊侯言堯・舜・黃帝之道、而重以燧人・神農之言。彼將內求於己而不得。不得則惑。人惑則死。……。」

これらの話では、孔子は顔回の政治力に憂慮を示しているが、『論語』本文7や本文21はそこまで及んでおらず、顔回の政治力の無さは、『莊子』の段階での創作であろう。

白川静氏は、莊周について、以下のように述べている。

……。莊子はことに顔回を愛した。この若い俊才は、その師孔子との対論において、おおむねつねにその師を論破し、低頭させている。それで郭沫若氏は、莊子の学は顔氏の儒から出たものであると推測しているが、それは確かに鋭い指摘である。顔氏の儒は、孔子晩年の思想を継承したものであるろう。……【注〇九】

儒家に対するきびしい批判者とされる莊子は、その精神的系譜からいえば、むしろ孔子晩年の思想の直系者であり、孟子は正統外の人である。孟子は自ら「孔子に私淑するもの」〔孟子・離婁下〕と称したが、私淑という点では、むしろ莊周の方が深いともいえるのではなからうか。【注一〇】

白川氏も郭氏と同様に、顔回と莊周との結びつきが、むしろ儒家の孟子よりも強い、ということを確認している【注一】。

一方、『孟子』では、

禹・稷当平世。三過其門而不入。孔子賢之。顔子当乱世。居於陋巷、一簞食、一瓢飲、人不堪其憂、顔子不改其樂。孔子賢之。孟子曰、「禹・稷・顔回同道。禹思天下有溺者由己溺之也。稷思天下有飢者由己飢之也。是以如是其急也。禹・稷・顔子、易地則皆然。今有同室之人鬪者、救之。雖被髮纓冠而救之、可也。郷鄰有鬪者、被髮纓冠而往救之、則惑也。雖閉戸、可也。」

（『孟子』離婁篇下）

とあるように、顔回を禹や后稷と次元の同じ者（聖人であろう）とみなしている。これにちかひのが、

子曰、「顔氏之子、其殆庶幾乎。有不善未嘗不知。知之未嘗復行也。」

『易』曰、「不遠復、无祇悔、元吉。」

（『易』繫辭下伝）

夫子曰、「顔氏之子、元庶幾乎。見幾又不善、未嘗不知。知之、未嘗復行之。」

『易』曰、「不遠復、无寔誨、元吉。」

（馬王堆漢墓帛書『周易』要篇）

という『易』伝の考え方であるが、顔回を聖人とみなすことが、当時はまだ認められていなかったようである。

四 『顔淵問於孔子』

ここでは、上海博物館所蔵戦国楚竹書『顔淵問於孔子』の全文について、筆者による釈文を示したうえで、表現（言葉遣い）や思想内容から検討を加え、私見を述べたい。

【釈文】

□嘗（顔）困（淵）窮（問）於孔（孔子）曰、「敢窮（問）君子之内事也又（有）道唐（乎）。」孔（孔子）曰、「又（有）。」嘗（顔）困（淵）「敢窮（問）可（何）女（如）。」孔（孔子）曰、「敬又（有）征（正）、而（第一簡）

□所以敬又（有）征（正）、所以爲退也。先（第二簡）

必不才戀（慈）之内矣。」嘗（顔）困（淵）西（第三簡）

内矣。備（庸）言之信、備（庸）言之敬（第四簡）

則誦（辭）、所以端（端）信也。奮（蓋）君子之内事也女（如）此矣。」嘗（顔）困（淵）曰、「君子之内事也、憲（回）既窮（問）命矣。敢窮（問）（第五簡）

君子之内教也又（有）道唐（乎）。」孔（孔子）曰、「又（有）。」嘗（顔）困（淵）「敢窮（問）可（何）女（如）。」孔（孔子）曰、「攸（修）身以尤、民莫不從矣。前（謙）（第六簡）

以尊（博）徳（愛）、則民莫遯（遺）新（親）矣。道（導）之以僉（儉）、則民智（知）足矣。前（謙）之以讓、則不靜（争）矣。或（又）迪而教（第七簡）

而旻（得）之、少（小）人靜（争）而達（失）之。（第八簡）

之、能（能）能（能）能（能）不臬（肖）而遠之、則民智（智）欽（禁）矣。女（如）進者翟（觀）行、退者智（智）欽（禁）、則元（其）於教也不遠矣。嘗（顔）困（回）曰、（第九簡）

「君子之内教也、憲（回）既窮（問）矣。」矣已。敢窮（問）至明。」孔（孔子）曰、「憲（回）則名至矣、名至必俾（使）壬（任）、任（任）給（治）大則录（禄）（第十簡）

旻（得）青（老）（老老）而戀（慈）學（幼）、所以尻（居）怠（仁）也、斂（斂）絞（交）而收貧、所以收（聚）（第十一簡）

□青（老）（老老）而戀（慈）學（幼）、斂（斂）絞（交）而收貧。录（禄）不足則青（請）、又（有）余（餘）則詒（辭）。新（親）也。录（禄）不足則青（請）、又（有）余（餘）（第十二簡）

逆（逆）行而信、先尻（居）忠也。貧而安樂、先尻（居）（第十三簡）

示則斤、而母（母）谷（欲）旻（得）安（焉）。（第十四簡）

実は、先学が指摘しているとおり、『顔淵問於孔子』は、このままの配列では、読めない。新たな配列として、大まかに言えば、第一簡・第十二簡前部・第二簡後部・第二簡前部・第十一簡・第十二簡後部・第五簡・第六簡・第七簡・第九簡・第十簡、という順序で読む案が示されていることを附言しておく【注一二】。

さて、表現の点では、「審（顔）困（淵）甯（問）於孔（孔子）」は、『莊子』田子方篇・知北遊篇の「顔淵問於仲尼」に似ている。また、顔回による「敢甯（問）〜」という尋ね方は、『莊子』人間世篇・達生篇・山木篇・知北遊篇に見られるものである。すなわち、表現の点では、『顔淵問於孔子』は主として『莊子』外篇と関係があるのではないか。

内容面では、全体として、「君子之内事」「君子之内教」「至明」の三つについて説かれている点は、『顔淵問於孔子』のオリジナルである。また、第七簡における「儉（儉）」「智（知）足」「不静（争）」は、いずれも『老子』に見える考え方であり、「前（謙）」「すなわちへりくだって奢らないことも『老子』に説かれる。謙遜の意味の「讓」は、『莊子』田子方篇に見える【注一三】。そして、第十三簡の「貧而安樂」は、『論語』本文6を踏まえたもので、まさに顔回の生き方を表現した文言である。

『莊子』外篇の作成に携わった莊周の後学が、『老子』や『論語』を援用しながら、自分たちの最も説きたい「君子之内事」「君子之内教」「至明」について記したのが、『顔淵問於孔子』である、と結論付けるのは、早計であろうか。

五 『史記』孔子世家・仲尼弟子列伝

ここでは、『史記』における顔回が登場するくだりを見てみることにしよう。

(一) 孔子世家

冒頭の文章における孔子誕生の経緯を記すところで、

孔子生魯昌平郷陬邑。其先宋人也、曰孔防叔。防叔生伯夏、伯夏生叔梁紇。

〔紀与顔氏女野合而生孔子、禱於尼丘得孔子。魯襄公二十二年而孔子生。〕

とあるが、特に傍線を引いた箇所を根拠にして、孔子は顔魯・顔回と親戚関係にあるのではないか、との見方も出ているが、それはよく分からないし、何とも言えない。

『史記』孔子世家に、顔回に関するくだりは、以下の①②③④のとおり、四つある。

① 将適陳、過匡、顔刻為僕、以其策指之曰、「昔吾入此、由彼缺也。」匡人聞之、以為魯之陽虎。陽虎嘗暴匡人、匡人於是遂止孔子。孔子狀類陽虎、拘焉五日。顔淵後、子曰、「吾以汝為死矣。」顔淵曰、「子在、回何敢死。」

② 孔子知弟子有愠心、乃召子路而問曰、「『詩』云「匪兕匪虎、率彼曠野」。吾道非邪。吾何為於此。」子路曰、「意者吾未仁邪。人之不我信也。意者吾未知邪。人之不我行也。」孔子曰、「有是乎。由、譬使仁者而必信、安有伯夷・叔齊。使知者而必行、安有王子比干。」

子路出、子貢入見。孔子曰、「賜、『詩』云「匪兕匪虎、率彼曠野」。吾道非邪。吾何為於此。」子貢曰、「夫子之道至大也、故天下莫能容夫子。夫子蓋少貶焉。」孔子曰、「賜、良農能稼而不能為穡、良工能巧而不能為順。君子能脩其道、綱而紀之、統而理之、而不能為容。今爾不脩爾道而求為容。賜、而志不遠矣。」

子貢出、顔回入見。孔子曰、「回、『詩』云「匪兕匪虎、率彼曠野」。吾道非邪。吾何為於此。」顔回曰、「夫子之道至大、故天下莫能容。雖然、夫子推而行之、不容何病、不容然後見君子。夫道之不脩也、是吾醜也。夫道既已大脩而不用、是有國者之醜也。不容何病、不容然後見君子。」孔子欣然而笑曰、「有是哉顔氏之子。使爾多財、吾為爾宰。」

③ 子貢曰、「夫子之文章、可得聞也。夫子言天道与性命、弗可得聞也已。」顔淵喟然歎曰、「仰之彌高、鑽之彌堅。瞻之在前、忽焉在後。夫子循循然善誘人、博我以文、約我以礼、欲罷不能。既竭我才、如有所立、卓爾。

雖欲從之、蔑由也已。」……。

④ 顔淵死、孔子曰、「天喪予。」

①は、部分的に『論語』本文19を踏まえている。

②は、『史記』において初めて登場する話であろうか。孔子の質問に、子路↓子貢↓顔回の順で回答し、最後の顔回の回答が孔子の意を得たもので終わっている。この子路・子貢・顔回の三者は、すでに引用した『莊子』讓王篇でも見られた組み合わせである。

③は、『論語』公冶長篇の「子貢曰、夫子之文章、可得而聞也、夫子之言性與天道、不可得而聞也。」という文言と『論語』本文8とを踏まえている。

④は、『論語』本文15を踏まえている。
以上から、②以外は、おおむね『論語』を情報源としていることが分かる。

(二) 仲尼弟子列伝

『史記』仲尼弟子列伝は、以下の文章で始まる。

孔子曰「受業身通者七十有七人」、皆異能之士也。德行、顔淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓。政事、冉有・季路。言語、宰我・子貢。文学、子游・子夏。師也辟、参也魯、柴也愚、由也喭、回也屢空。賜不受命而貨殖焉、億則屢中。

この文章は、「孔子曰「受業身通者七十有七人」、皆異能之士也。」以外の部分が、『論語』本文11・18と『論語』先進篇の「柴也愚、参也魯、師也辟、由也喭。」とを踏まえている。

仲尼弟子列伝では、この文章の直後に孔子が尊敬した複数の人物に関する文章が続き、その後、孔子の弟子たちの伝記が始まる。その弟子たちの伝記の劈頭が、顔回の伝記である。このことは、『史記』の作者が（あるいは『史記』成立時点での知識人の大方の評価として）顔回を孔子の筆頭弟子であると認め

たことを示しているよう。

以下は、『史記』仲尼弟子列伝における顔回伝の全文である。

顔回者、魯人也、字子淵。少孔子三十歳。

顔淵問仁、孔子曰、「克己復礼、天下歸仁焉。」

孔子曰、「賢哉回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回不改其樂。」

「回也如愚。退而省其私、亦足以發、回也不愚。」「用之則行、捨之則藏、

唯我与爾有是夫。」

回年二十九、髮尽白、蚤死。孔子哭之慟、曰、「自吾有回、門人益親。」魯

哀公問、「弟子孰為好學。」孔子對曰、「有顔回者好學、不遷怒、不貳過、

不幸短命死矣、今也則亡。」

この文章は、「顔回者、魯人也、字子淵。少孔子三十歳。」「回年二十九、髮尽白、蚤死。」「曰、「自吾有回、門人益親。」」以外の部分が、『論語』本文1・4・6・7・16・20を踏まえている。孔子と顔回の年齢の違いや顔回の死に言及するのは、『史記』のこの記述からであろう。

このように、『史記』仲尼弟子列伝における顔回伝は、圧倒的に『論語』からの情報で構成されている。ただ、顔淵の死については、『論語』からは「短命」ということくらいしか分からないが、『史記』仲尼弟子列伝は「回年二十九、髮尽白、蚤死。」というかなり具体的な情報を記している。『論語』に基づかないこの情報が、後世、ひとりあるきして尾端が付くことになる。

六 前漢時代の説話資料

ここでは、顔回について、前漢時代にどのような説話があったのかを、説話の宝庫である『韓詩外伝』と劉向の『新序』『説苑』から、うかがうことにしたい。

『韓詩外伝』と劉向の著作に共通する話が、以下のⅠ・Ⅱのとおり、二つある。

Ⅰ

.....

①『韓詩外伝』卷二

顔淵侍坐魯定公于台、東野畢御馬于台下。

定公曰、「善哉。東野畢之御也。」

顔淵曰、「善則善矣、其馬將佚矣。」

定公不説、以告左右曰、「聞君子譖人。君子亦譖人乎。」

顔淵退、俄而厩人以東野畢馬佚聞矣。定公躡席而起、曰、「趣駕召顔淵。」

顔淵至、定公曰、「郷寡人曰、『善哉。東野畢之御也。』吾子曰、『善則善矣、然則馬將佚矣。』不識吾子何以知之。」

顔淵曰、「臣以政知之。昔者舜工於使人、造父工於使馬。舜不窮其民、造父不極其馬。是以舜無佚民、造父無佚馬也。今東野畢之御、上車執轡、銜体正矣、周旋步驟、朝礼畢矣、歷險致遠、馬力殫矣、然猶策之不已、所以知其佚也。」

定公曰、「善、可少進乎。」

顔淵曰、「獸窮則鬻、鳥窮則啄、人窮則詐。自古及今、窮其下能不危者、未之有也。『詩』曰、『執轡如組、兩驂如舞。』善御之謂也。」

定公曰、「寡人之過矣。」

②『新序』雜事五

顔淵侍魯定公于台、東野畢御馬于台下。

定公曰、「善哉。東野畢之御。」

顔淵曰、「善則善矣、雖然、其馬將失。」

定公不悅、以告左右曰、「吾聞之、君子不譖人、君子亦譖人乎。」

顔淵不悅、歷階而去。須臾、馬敗聞矣。

定公躡席而起曰、「趣駕、請顔淵。」

顔淵至、定公曰、「向寡人曰、『善哉。東野畢之御也。』吾子曰、『善則善矣、雖然、其馬將失矣。』不識吾子何以知之也。」

顔淵曰、「臣以政知之。昔者舜工於使人、造父工於使馬。舜不窮其民、造父不盡其馬。是以舜無佚民、造父無失馬。今東野畢之御、上車執轡、御体正矣、周旋步驟、朝礼畢矣。歷險致遠、而馬力殫矣、然求不已、是以知其失也。」

定公曰、「善、可少進與。」

顔淵曰、「獸窮則觸、鳥窮則啄、人窮則詐。自古及今、窮其下能無危者、未之有也。『詩』曰、『執轡如組、兩驂如舞。』善御之謂也。」

定公曰、「善哉、寡人之過矣。」

この話は、実は、以下の『荀子』哀公篇に由来するものである、と思われる。

定公問於顔淵曰、「東野子之善御乎。」

顔淵曰、「善則善矣、雖然、其馬將失。」

定公色不悅、入謂左右曰、「君子固有譖人。」

三日而校來謁曰、「東野畢之馬失、兩驂列兩服入厩。」

定公越席而起曰、「趣駕召顔淵。」

顔淵至、定公曰、「前日、寡人問吾子、吾子曰、『東野畢之御、善則善矣、其馬將失。』不識吾子何以知之。」

顔淵對曰、「臣以政知之。昔舜巧於使人、而造父巧於使馬。舜不窮其民、造父不窮其馬。是以舜無佚民、造父無失馬也。今東野畢之御、上車執轡、銜体正矣。步驟馳騁、朝礼畢矣。歷險致遠、馬力尽矣。然猶求馬不已、是以知之也。」

定公曰、「善、可得少進乎。」

顔淵曰、「臣聞之、鳥窮則啄、獸窮則攫、人窮則詐。自古及今、未有窮其下而能無危者也。」

この『荀子』哀公篇の話には、『詩』からの引用と、君主が自らの過ちに気付く場面とが無い。これらは、前漢時代に付け足されたものと考えられる。

また、顔回は貧窮の境遇にいたことからも分かるとおり、出仕していないかたのではないかとと思われる(『論語』本文21で国政について問うてはいるが…)。したがって、顔回が魯の定公のもとへ出仕しているかのような話は、当然、フィクションである。ただ、『論語』には、顔回が出仕したともしなかったとも記されていないので、出仕したものととして説話が作られても不思議なことではない。後世の儒者が、出仕している顔回像を理想として描いたものなのか、それ

とも、『莊子』における顔回の出仕が不向きであるという話に対抗して儒家側が意図的に作り上げた話なのか。

II

①『韓詩外伝』卷七

孔子遊於景山之上、子路・子貢・顔淵從。

孔子曰、「君子登高必賦。小子願者、何言其願。丘將啓汝。」

子路曰、「由願奮長戟、盪三軍、乳虎在後、仇敵在前、蠡躍蛟奮、進救

兩國之患。」

孔子曰、「勇士哉。」

子貢曰、「兩國構難、壯士列陣、塵埃漲天、賜不持一尺之兵。一斗之糧、

解兩國之難。用賜者存、不用賜者亡。」

孔子曰、「辯士哉。」

顔回不願。

孔子曰、「回何不願。」

顔淵曰、「二子已願、故不敢願。」

孔子曰、「不同、意各有事焉。回其願、丘將啓汝。」

顔淵曰、「願得小国而相之。主以道制、臣以德化、君臣同心、外内相應。

列国諸侯、莫不從義嚮、壯者趨而進、老者扶而至。教行乎百姓、德施乎四

蛮、莫不積兵、輻輳乎四門。天下咸獲永寧、蜺飛蠕動、各樂其性。進賢使

能、各任其事。於是君綏於上、臣和於下、垂拱無為、動作中道、從容得礼。

言仁義者賞、言戰鬪者死。則由何進而救。賜何難之解。」

孔子曰、「聖士哉。大人出、小人匿。聖者起、賢者伏。回與執政、則由

賜焉施其能哉。」

『詩』曰、「雨雪庶庶、曠視聿消。」

②『韓詩外伝』卷九

孔子與子路・子貢・顔淵游於戎山之上游。

孔子喟然嘆曰、「二三子各言爾志、予將覽焉。由爾何如。」

對曰、「得白羽如月、赤羽如日、擊鐘鼓者、上聞於天、旌旗翩翩、下蟠

於地、使將而攻之、惟由為能。」

孔子曰、「勇士哉。賜爾何如。」

對曰、「得素衣縞冠、使於兩國之間、不持尺寸之兵、升斗之糧、使兩國

相親如兄弟。」

孔子曰、「辯士哉。回爾何如。」

對曰、「鮑魚不與蘭茝同筍而藏、桀・紂不與堯・舜同時而治。二子已言、

回何言哉。」

孔子曰、「回由鄙之心。」

顔淵曰、「願得明王聖主為之相、使城郭不治、溝地不鑿、陰陽和調、家

給人足、鑄庫兵以為農器。」

孔子曰、「大士哉。由来、区区汝何攻。賜来、便使汝何使。願得衣冠為子宰焉。」

③『說苑』指武篇

孔子北遊東上農山、子路・子貢・顔淵從焉。

孔子喟然歎曰、「登高望下、使人心悲、二三子者、各言爾志、丘將聽之。」

子路曰、「願得白羽若月、赤羽若日、鐘鼓之音、上聞於天、旌旗翩翩、

下蟠於地、由且拳兵而擊之、必也攘地千里、獨由能耳。使二三子者為我從

焉。」

孔子曰、「勇哉士乎。憤憤者乎。」

子貢曰、「賜也願齊・楚合戰於莽洋之野、兩壘相当、旌旗相望、塵埃相接、

接戰構兵、賜願著縞衣白冠、陳說白刃之間、解兩國之患、獨賜能耳。使

二三子者為我從焉。」

孔子曰、「辯哉士乎。僂僂者乎。」

顔淵獨不言。

孔子曰、「回来、若独何不願乎。」

顔淵曰、「文武之事、二子已言之、回何敢与焉。」

孔子曰、「若鄙心不与焉、第言之。」

顔淵曰、「回聞鮑魚蘭芷不同篋而藏、堯・舜・桀・紂不同国而治。二子

之言、与回言異。回願得明王聖主而相之、使城郭不修、溝池不越、鍛劍戟

以為農器、使天下千歲無戰鬪之患。如此、則由何憤憤而擊、賜又何僂僂而

使乎。」

孔子曰、「美哉徳乎。姚姚者乎。」

子路拳手問曰、「願聞夫子之意。」

孔子曰、「吾所願者、顔氏之計、吾願負衣冠而從顔氏子也。」

この話は、実は、以下の『荀子』子道篇を原型とするのではないか、と思われる。

子路入。

子曰、「由、智者若何。仁者若何。」

子路対曰、「智者使人知己、仁者使人愛己。」

子曰、「可謂士矣。」

子貢入。

子曰、「賜、智者若何。仁者若何。」

子貢対曰、「智者知人、仁者愛人。」

子曰、「可謂士君子矣。」

顔回入。

子曰、「回、智者若何。仁者若何。」

顔淵対曰、「智者自知、仁者自愛。」

子曰、「可謂明君子矣。」

(『荀子』子道篇)

『史記』孔子世家における孔子と子路・子貢・顔回との問答でも、『荀子』子道篇と同様に子路→子貢→顔回の順で孔子に回答し、顔回の回答が孔子の意を得たものとなって終わるこのパターンについても、『荀子』子道篇のこの話を原型とするものであろう。

孔子が子路と顔回に「志」を尋ねて二人が答えるのは、『論語』本文3に見える。このほか、勇士・辯士・聖士(『韓詩外伝』巻七)、勇士・辯士・大士(『韓詩外伝』巻九)、勇士・辯士・美德(『説苑』指武篇)と、顔回について言われる表現が異なっているのも特徴であるが、これも『荀子』子道篇の士・士君子・明君子をアレンジしたものと見えよう。

この話では、景山・戎山・農山と名称が一致していないが山が舞台になっている。山名はともかく、この山を舞台とする点、おそらく、後の『論衡』における顔回の話に影響を与えているのではないか、と思われる。

七 『論衡』における顔回像―顔回の死をめぐる―

王充『論衡』を通じて、圧倒的に多い顔回に関する話は、顔回の死をめぐるものである。これは、以下の①②③の三例の引用のとおり、顔回の死を、王充が彼独自の運命論で理解しようとする傾向が強いことに起因している。

① 幸偶篇

孔子門徒七十有餘、顔回蚤夭。孔子曰、「不幸短命死矣。」短命称不幸、則知長命者幸也、短命者不幸也。服聖賢之道、講仁義之業、宜蒙福祐。伯牛有疾、亦復顔回之類、俱不幸也。

② 命義篇

遭命者、行善於内、遭凶於外也。若顔淵・伯牛之徒、如何遭凶。顔淵・伯牛、行善者也、当得随命、福祐随至、何故遭凶。顔淵困於学、以才自殺、伯牛空居而遭恶疾。

③ 偶会篇

顔淵死、子曰、「天喪予。」子路死、子曰、「天祝予。」孔子自傷之辞、非実然之道也。孔子命不王、二子寿不長也。不王不長、所稟不同、度数並放、適相應也。

①の孔子曰、「不幸短命死矣。」は、『論語』本文4・13を踏まえたもの、③の「子曰、「天喪予。」」は、『論語』本文15を踏まえたもの、である。その運命論の中で、顔回は伯牛とともにとり上げられているのが特徴である。伯牛といえ、『論語』雍也篇に、

伯牛有疾。子問之、自牖執其手曰、「亡之、命矣夫、斯人也而有斯疾也、斯人也而有斯疾也。」

と記される、ハンセン病を患ったとされる冉伯牛のことである。すなわち、顔回と伯牛の二人は、早世と病気を理由に、孔子門下の不幸の代表者とされているのである。

また、以下の①②の話は、『史記』仲尼弟子列伝の「髮尽白」を「髮白齒落」までに膨らませ、前漢時代までの孔子と顔回たち弟子とが一緒に山へ出かけた話が結びついたもの、と思われる。

①書虚篇

伝書或言、顔淵与孔子俱上魯太山、孔子東南望、吳閭門外有繫白馬、引顔淵以示之、曰、「若見吳昌門乎。」顔淵曰、「見之。」孔子曰、「門外何有。」曰、「有如繫練之状。」孔子撫其目而止之、因与俱下。下而顔淵髮白齒落、遂以病死。蓋以精神不能若孔子、彊力自極、精華竭尽、故早夭死。……

②効力篇

秦武王与孟説举鼎不任、絶脉而死。少文之人、与董仲舒等涌胸中之思、必将不任、有絶脉之变。王莽之時、省五経章句、皆為二十万、博士弟子郭路、夜定旧説、死於燭下、精思不任、絶脉氣滅也。顔氏之子、已曾馳過孔子於塗矣、劣倦罷極、髮白齒落。夫以庶幾之材、猶有仆頓之禍、孔子力優、顔淵不任也。才力不相如、則其知思不相及也。勉自什伯、兩中嘔血、失魂狂乱、遂至氣絶。

すなわち、顔回には、孔子ほどの「精神」と「力」が無かったため、精も魂も尽き果てて死んだ、とされているのである。「短命」であり、「精神」と「力」の点で孔子に及ばない「庶幾之材」である顔回像を描けよう。

前節でいくつか説話を見てきたが、管見のかぎり、実は、顔回の死に関する説話は、前漢時代には無いようである。語り継がれていく話として、貧窮にあえぎながらも楽しみを忘れなかった(＝学問に精励した)顔回について、その

死の話題はふさわしくないからであろう。

しかし、このように顔回の死について憚ることなく言及するのは、運命論者である王充ならではないことと言わざるを得ない。

八 『論語』鄭氏注

『論語』の顔回が登場する文章に対する鄭玄注は、他の注と比べても、さほど際立った特徴は無い。むしろ、顔回に関するものと特定できない文章に対する鄭玄注にこそ、彼の本領が発揮されているように思う。ここでは、敦煌本ベリオ文書二五〇一号から、二つの箇所をとりあげる。

まず、一つ目は、太伯篇の文章である。

曾子曰、以能問於不能、以多問於寡、有若無、實若虚、犯而不效。昔者、吾友常從事於斯矣。

鄭注・效、報也。言人見侵犯不報。顔淵・仲弓・子貢等也。

『論語集解』…馬曰、友謂顔淵。

『論語』本文の「吾友」は、特定の人物を想定しているわけではないであろう。馬融は「友」について「顔淵」との見方をくだした。馬融に師事した鄭玄は、その影響を受けたのであろう、ただし顔回一人に限定しない形で、「顔淵・仲弓・子貢等也」と注している。但し、顔回は、曾参より十六歳年上である。「顔淵・仲弓・子貢」の三者は、みなほぼ同年代のため曾参より十数歳年上である。十数歳年上の人を「吾友」と呼ぶばあいもあるが、ここはどうだろうか。二つ目は、子罕篇の文章である。

子曰、語之而不惰者、其回也歟。

鄭注・惰、懈惰也。

『論語集解』…顔淵則解、故語之不惰、餘人不解、故有惰語之時也。

子謂顔淵曰、惜乎、吾見其進也。未見其退也。

鄭注・顔淵病。孔子往省之。故發此言。痛惜之甚。

『論語集解』…包曰、孔子謂顔淵進益未止。痛惜之甚。

子曰、苗而不秀有矣夫。秀而不實者有矣夫。

鄭注・不秀論項託。不實論顔淵。

『論語集解』…孔安國曰、言萬物有生而不育成者、喻人亦然也。

子曰、後生可畏。焉知來者之不如今也。

鄭注・後生謂幼稚。斥顔淵也。可畏者、言其才美服人也。孟子曰、吾先

子之所畏、是時顔淵死矣。故發言、何知來世將無此人。

『論語集解』…後生謂年少也。

卅五十而無聞焉。斯亦不足畏也已。

鄭注・言年如此、而才德不聞、此不足畏也。

「顔淵病」は、鄭玄による設定であり、「秀而不實者」や「後生」も、顔淵と関係するかどうか定かでないのに、鄭玄は顔淵であるとする。すなわち、ふつうに読めば、顔淵についてのくだりであると思えない『論語』の文章が、鄭玄によって具体化・限定化されてしまったのである。金谷治氏は、「そうした具体的現実的な情況の設定によって、孔子の発言は、他の注釈のばあいでのように、抽象的な広がりで一般的に理解されることのないよう、現実的な場にひきとめられている。」と述べている【注一四】。これによって、本来それぞれ単独で理解されるであろう子罕篇の五つの本文は、顔回について記された一続きの文章として捉えられることになったのである。

以下の白川静氏の文章は、明らかに、子罕篇に対する鄭玄注の影響を受けたものである。

孔子にとって、顔回はおそるべき後生であった。「子曰く、これに語りて情らざるものは、それ回なるか」「子罕」。孔子のことばを、かれはすべて理解することができたのであろう。このようなおそるべき弟子があるで

あろうか。「惜しいかな。われその進むを見るも、いまだそのとどまるを見ざるなり」「同」。瞬時やむことを知らぬこの年少者の精進は、ついに孔子をして「後生畏るべし。いづくぞ來者の今に如かざるを知らんや」「同」という歎声を発せしめている。また「公治長篇」には、子貢に、「われと女と、如かざるなり」とさえ告げている。孔子も、一目おくほどの弟子であった。【注一五】

九 後漢末の孔子と顔回——孔融と禰衡——

後漢末期、孔融（孔子二十世の孫、一五三〜二〇八）と禰衡（一七三〜一九八）は、二十歳の年齢差を超えて交友関係を育み、お互いを孔子と顔回の関係に擬えた。范曄『後漢書』には、以下のように記される。

唯善魯国孔融及弘農楊脩。常称曰、「大兒孔文學、小兒楊德祖。餘子碌碌、莫足数也。」融亦深愛其才。衡始弱冠、而融年四十、遂与為交友。上疏薦之曰、「……」融既愛衡才、数称述於曹操。……（文苑列伝下・禰衡伝）

曹操既積嫌忌、而郗慮復搆成其罪、遂令丞相軍謀祭酒路粹枉狀奏融曰、「少府孔融、昔在北海、見王室不靜、而招合徒衆、欲規不軌、云『我大聖之後、而見滅於宋、有天下者、何必卯金刀。』及与孫權使語、謗訕朝廷。又融為九列、不遵朝儀、秃巾微行、唐突宮掖。又前与白衣禰衡跌蕩放言、云『父之於子、当有何親。論其本意、実為情欲發耳。子之於母、亦復奚為。譬如寄物甌中、出則難矣。』既而與衡更相贊揚。衡謂融曰、『仲尼不死。』融荅曰、『顔回復生。』大逆不道、宜極重誅。」書奏、下獄弃市。時年五十六、妻子皆被誅。（孔融伝）

この二人の交友関係について、串田久治氏は、次のように述べている。

一方、二人が互いに「孔子の再来」「顔回の生まれかわり」といいあったことも、かれらが二十歳という年のへだたりを越えて互いに尊重しあい、

孔融が禰衡の夭逝を傷んだことは事実であるのだから、その意味では二人の関係は孔子と顔回のそれに似ていた。ただ、顔回が死んだとき、孔子は「噫、天、予を喪せり、天、予を喪ほせり」（『論語』先進篇）と慟哭した。それに対し、孔融にとつて禰衡の死は、人知れず反逆を決意したことにおいて大きな意味をもっていた。【注一六】

禰衡の「魯夫子碑」と「顔子碑」が残されて伝わっている。これらは、孔融と自らの関係を念頭に作られたものであろうか。言い換えれば、特に「顔子碑」は、禰衡が自らを顔回到重ねて作られたものであろうか。以下は、「顔子碑」全文である。

稟天地之純和、鍾岳瀆之休靈、睿哲之資、誕自初育。英絶之才、顯乎嬰孩。在東修之齒、入宣尼之室、德行適於三千、仁風橫於萬國、知微知章、聞一覺十、用行舍藏、与聖合契。名為四友之冠、寔尽疏附之益。爾乃安陋巷、挹清流、甘筆瓢以充飢、雖屢空而不憂、于時河不出圖、周祚未訖。仲尼無舜・禹之功、先生包元凱之烈。其辞曰、「亜聖徳、踏高蹤、游洙泗、肅礼容備懿体、心弥冲、秀不実、振芳風、配聖饋、凶辟雍、紀德行、昭罔窮。」

【注一七】

「顔子碑」は、『論語』本文2・6・7・18を踏まえ、「与聖合契」とされながら「亜聖」と記されている。孔子から自分よりも能力が上であると認められながらも孔子と同等にも評価されないのは、所詮顔回は孔子の門弟にすぎないからである。彼自ら孔子に及ばないことを吐露している点（『論語』本文8）も、このような評価に影響したであろうか。ともあれ、顔回が、聖人として評価されるようになるのは、宋代を待たねばならない【注一八】。

十 おわりに

後漢時代の思想研究の一つの課題として、『莊子』の影が薄い、という問題がある【注一九】。

もし『莊子』が「顔氏之儒」の系統を引いているのであれば、後漢時代の不出仕・隱逸の傾向は、『論語』と『莊子』の考え方に起因しているのではないかとえば、『論語』本文11で顔回とともに「德行」に名を列ねている閔子騫は、季氏から費というムラの役人になってほしいと請われるが、断っている（雍也篇）。すなわち、仕官の拒絶である。また、『莊子』には、顔回が仕官を願わない話が讓王篇に見える。自らの出処進退については、周囲の人々から、とやかく言われるものであり、特に後漢時代には、身内・官界・外界との接触を避け、俗世間を離れる処士・隱逸者たちが顕著になっていった。その根本に『論語』や『莊子』の考え方が横たわっているのであれば、後漢時代に表舞台に現れなかった『莊子』の役割をある程度は明らかにすることができるのではなからうか。本稿がその手がかりとなるのであれば幸いである。

注

【注〇一】 木村英一「顔淵について」（『東方学会創立二十五周年記念東方学論集』、財団法人東方学会、一九七二年）。

【注〇二】 皮錫瑞『經学歴史』の「二 經学流伝時代」。

【注〇三】 皮錫瑞『經学歴史』周子同注釈本（中華書局、一九五九年二月）。

【注〇四】 郭沫若『十批判書』（科学出版社、一九五六年一月）の「儒家八派的批判」。

【注〇五】 郭沫若『十批判書』（前掲）の「莊子的批判」。

【注〇六】 郭沫若『十批判書』（前掲）の「莊子的批判」。

【注〇七】 衣笠勝美「孔子・顔回と莊子―その思想に於ける共通性と影響について―」（『沼尻博士退休記念中国学論集』、沼尻正隆先生古稀記念事業会、一九九〇年一月）。

【注〇八】 池田知久「莊子」上（学習研究社、一九八三年八月）人間世篇の補注の二。

【注〇九】 白川静「孔子伝」（中央公論社、一九七二年二月／中公文庫、一九九二年二月）。

ここでは、中公文庫二〇六頁に拠る。

【注一〇】 白川静「孔子伝」（中央公論社、一九七二年一月／中公文庫、一九九一年二月）。ここでは、中公文庫二〇八頁に拠る。

【注一一】 これには反対意見もある。衣笠勝美氏前掲論文は、こう述べる。
しかし、内篇の記述を見る限り、莊子の孔子や顔回から受けたであろうと

考えられる影響は、あくまでもその現象面に於いてのみであり、思想的には何ら影響を受けているとは考えられない。白川氏は、郭氏の莊子は「顔氏の儒」から出た人であるという説を「鋭い指摘である」とし、更に「顔氏の儒は、孔子晩年の思想を継承したものであろう。それは流れて楚狂となる。——中略——。莊子もまた、楚狂の徒であった。」と述べて肯定しているが、

莊子と顔回の結び付きを両者の思惟する所を比較して考えてみても、現象面に於ける相関は見られるものの、思想的な関連は希薄であり、直接的な道統関係にはなかったのではないかと思われる。寧ろ顔回後学の伝習録を、莊子の後学が戦国時代末期の百家争鳴する状況の中で、引用或いは借用し、その結果先に引いた田子方篇のような説話が形成されていったのではないかと考えられるのである。（九八頁）

【注一〇】『顔淵問於孔子』の釈文は、『上海博物館藏戰國楚竹書（八）』（上海古籍出版社、二〇一一年五月）の配列のとおり、ひとまず示しておいた。新たな配列案については、「内事」「内教」に絞って考察した陳偉著、近藤浩之・和田敬典譯『顔淵問於孔子』内事、内教二章校讀（『中国哲学』第三十九号、北海道中国哲学会、二〇一一年一月）や、湯浅邦弘「上博楚簡『顔淵問於孔子』と儒家系文献形成史」（『中国研究集刊』劍号、大阪大学中国学会、二〇一二年二月）を参照。

【注一一】「讓」については、小寺敦「先秦秦漢の伝世文献にみえる「讓」について——先秦儒家系文献を中心として——」（『東洋文化研究所紀要』第百五十六冊、東京大学東洋文化研究所、二〇〇九年十二月）を参照。

【注一二】金谷治『唐抄本 鄭氏注論語集成』（平凡社、一九七八年五月）所収「鄭玄と論語」三九四頁。

【注一三】白川静『孔子伝』（前掲）。ここでは、中公文庫二五九頁。

【注一四】串田久治「孔融と禰衡」（愛媛大学法文学部論集 文学科編）第十七号、愛媛大学法文学部、一九八四年一月）八四頁。

【注一五】『藝文類聚』卷二十、人部四「賢」。このほか、文字に異同があるが、『初学記』卷第十七「賢第二」に一部が引用され、『全上古三代秦漢三國六朝文』の『全後漢文』卷八十七に全文が掲載されている。

【注一六】柴田篤「顔子没而聖学亡」の意味するもの——宋明思想史における顔回——（『日本中国学会報』第五十一集、日本中国学会、一九九九年一〇月）、土田健次郎「道

学の形成」（創文社、二〇〇二年二月）を参照。

【注一七】余敦康「從《莊子》到郭象《莊子注》」（陳明主編『原道』第三輯、中国廣播電視出版社、一九九六年一月）の二、莊学的沈寂与復興、熊鉄基・劉固盛・劉韶軍「中国莊学史」（湖南人民出版社、二〇〇三年一〇月）の第二章第二節「潜行的《莊子》」等を参照。

【附記】本稿は、以下の四つの重要な機会を経て成ったものである。

① 井之口哲也「王充的顔淵觀——圍繞對於顔淵之死的理解」（『第十一屆世界顔氏文化聯誼暨国学傳承與東亞經濟國際學術研討會論文集』、於成都・金牛賓館、二〇一〇年一〇月一〇日）。

② 井之口哲也「關於《莊子》中的顔回」（『國際儒學論壇・2010 儒家思想與社會治理論文集』、於中国人民大学、二〇一〇年二月五日）。

③ 井ノ口哲也「顔回素描——『論語』と『史記』から」（『成城大学共通教育論集』第三号、成城大学共通教育研究センター、二〇一一年三月）。

④ 「後漢時代における顔回像」（中国出土資料学会平成二四年度第一回例会、於流通経済大学松戸キャンパス、二〇一二年七月二一日）／『中国出土資料学会会報』第五一号、中国出土資料学会、二〇一二年二月）。

①②④は、いずれも口頭発表である。発表の際、貴重な御意見をくださった参加者各位に、この場を借りて感謝し、御礼を申し上げます。